

## 保健室を読みとく

### 1990年から20年間の保健室を事例に

久保千恵子(東北大学大学院教育学研究科)

学校の片隅で健康診断やけがをした時の手当で以外は、子どもが訪れることもなくひっそりとして場所が保健室であった。しかし、いつの間にか、休み時間や放課後になると子どもであふれている場所として、今の保健室がある。また、授業中にも不定愁訴や相談でやってくる子どもがいる。保健室登校で、教室にはいかず保健室で過ごす子どももいる。子どもにとって、授業を受けたり、友達と過ごしたりする教室は、大切な場であったはずである。しかし、教室に入れない子ども、教室を拒否する子どもの存在は、何を意味しているのだろうか。子どもが集まる場所である今の保健室を読みとくことで、1990年からの20年間のことについて、子どもの状況や現代社会を考察していくことにした。

調査結果から、子どもの気持ちを表した言葉や養護教諭の気持ちを表した言葉として、4名の養護教諭の語りを取り上げる。まず、1990年代に中学校勤務であった養護教諭の語りである。一つは「先生、俺、一番無視されるのが嫌なんだぜ。」と無視されることの悲しみ、二つは「俺、生まれ変わったら、よくできなくてもいいけど、普通に勉強ができるようになりたいな。いいんだよ。すごくできなくても、だけど普通にわかるようになりたい。」と家庭や部活動の問題そして勉強もわからず授業についていけない子どもの言葉であった。この言葉の裏には、問題がある子は無視する、授業についてこれない子は放置する、そういった学校の事情が見えてくる。1991年の中央教育審議会答申、さらに二次答申では、どの子にも同じ内容を教え込むことはいいことだとする考えを否定し、本人が学びたいと思うことだけを学ばせればいい、そして能力がない子には無理をさせるなという考えである。この方針に従って学習指導要領は改訂され、教師は能力のないとされる子への指導をやめた。例えば、筆者の勤務校では毎月漢字テストを行い不合格の生徒は、繰り返し指導をしていた。それがいつの間になくなった。他の教科も同様である。繰り返し指導しないことで、分からない子は放置された。そして、打ち捨てられた子どもは、大量に作り出されていった。次に、「いろんなことを子どもと話をしな、少しでも自分と話したことによって、子どもが救われたかどうかかわからないけど、安心して帰れたとか」と子どもに安心を与えて帰りたいという養護教諭の語りがあった。この背景には、学校や教室が不安を抱く場所となっている実態が推測される。1990年以降の実施されている教育改革の中に、「関心・意欲・態度」や「思考・判断」の評価を重視するという評価尺度の多元化、複数化がある。そして、評価を点数に換算するのである。このことは、中学生にとって、生活や活動の全てが評価や選抜の対象となることを意味する。常に、教師のまなざしを意識し自己コントロールしなければならない状況に子どもは置かれ緊張と不安をもたらしていると思われる。

この20年間は、「ゆとり教育」「個に応じた指導」「主体的な学習」「生きる力」というスローガンで進められた教育改革は、暗い影となり子どもの変化に影響を与えている。教育改革は、子どもを選抜・分別する教育システムへの転換であり、自由な市場原理のもとで競争を強い、自己責任とする現代社会の流れであった。このため、社会のシステムに適應できる少数の子どもと適應できない大量の子どもを生み出した。子どもは、混乱し緊張と不安を抱え学校生活は不安定となった。適應できない子どもは、消費社会から疎外される貧困層を将来形成するだろう。適應できていた子どもも、生き残るために競争し続けなければならない。緊張の中で、精神不安定となる。競争と管理のまなざしの中で育つ子どもにとって、つかの間の居場所となっている保健室は、子どもを通して現代社会を映している場所である。保健室を読み解くことで、今の社会をさらに読み深めていくことを、今後の課題としていきたい。

【 養護教諭、保健室、教育改革 】